

Title	郁達夫における谷崎潤一郎受容：『痴人の愛』と『迷羊』を中心として
Author(s)	荊, 紅艶
Citation	阪大比較文学. 7 P.133-P.144
Issue Date	2013-03
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/27369">http://hdl.handle.net/11094/27369</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 郁達夫における谷崎潤一郎受容 — 『痴人の愛』と『迷羊』を中心として—

荊紅艷

JING Hongyan

## はじめに

谷崎潤一郎は、日本の耽美派文学の代表的人物として、芸術主張や創作方法等の方面において、日本留学を経験した中国人作家たちに深い影響を与えた。在日中国人留学生で結成され、中国近代文学史の中に重要な位置を占めた文学団体創造社の初期文学を伊藤虎丸氏が「芸術派・浪漫派」と概括している<sup>1</sup>ように、創造社の人々の芸術至上主義の芸術観は、谷崎を始めとする耽美派と類似するところが多い。また、谷崎作品は、中国において三十年代と八、九十年代の二回の翻訳ブームを起し、これによって、多くの中国文学者は谷崎作品と接触し、その影響を受けた<sup>2</sup>。だが、谷崎が中国近現代作家に与えた影響に関する先行研究は、日中両国を見渡してもあまり見られない。

郁達夫は創造社の創始者であり、主要な作家でもある。彼は一九一三年から一九二二年まで日本に留学し、日本で執筆活動を始めた。日本の近代文学が郁達夫に与えた影響とえば、ある特定の作家や文芸思潮でなく、むしろ、憧れの対象として全体的に自由に吸収したと思われる。これまでの日中両国の研究者たちは郁達夫の自然主義文学や私小説作家から受けた影響については考察してきたが、郁達夫が谷崎文学から受けた影響に触れている先行研究は極めて少ない。

そこで、拙論は郁達夫と谷崎に関する言及を踏まえたうえで、実証的に郁達夫の谷崎文学との接触を考察しようとする。この前提に基づき、谷崎の『痴人の愛』と郁達夫の『迷羊』二つの作品を取り上げて比較を行い、郁達夫における谷崎受容のあり方を考察してみたい。

## 1 郁達夫の谷崎文学との接触

まず最初に、彼の日本語能力がどの程度のものであるかについては、いかに谷崎文学と接触したかという問題に直結しているため、考察する必要があると思われる。李麗君氏は郁達夫の日本語能力を実証的に考察した。李氏は補習学校から高等学校の時間割を調べ、学校の重要な科目の一つとして、郁達夫はかなりのペースで日本語の習得を続けていて、少なくとも一九一六年、即ち名古屋八高在学時代の郁達夫は、すでにほとんど自在に日本語を操ることが出来たという結論を出した<sup>3</sup>。

井伏鱒二も、郁達夫が一九三六年来日時、二人が会ったことを書いており、「どんなことを話したか詳しくは覚えていないが、日本語は非常に上手だった。話題は豊富で全体を見渡せる眼を持っているという印象を受けた。なかなか如才ないところもある人で、よく喋り、日本の文壇のゴシップにも、驚くほどよく通じていた」と語っている<sup>4</sup>。

また、李氏は郁達夫が日本語で書いた作品や書簡十点、中国語に翻訳した日本の作品三点を挙げた<sup>5</sup>。李氏が挙げた文章以外に、郁達夫が日本語で書いた作品や書簡、翻訳作品も以下のように残されている。

1、小説「円明園の一夜」一九二〇年六月<sup>6</sup>

- 2、講演録「中国詩壇の現状」『帝国大学新聞』第六百五十三号「文学」一九三六年十二月
- 3、書簡 小田嶽夫宛 一九三七年三月十五日 鈴木正夫編「郁達夫の小田嶽夫あて書簡」『中国文芸研究学会会報』第五十期、一九八五年二月十五日
- 4、翻訳「愛的開脱」(林房雄作) 一九二七年十一月二十三日日訳『一般』第四卷第一期 一九二八年一月

そのうち、日本語小説「円明園の一夜」は遺族により長い間保管され、二〇〇七年十月に初公刊された作品である。こうした点から見ると、郁達夫は確実にして十分な日本語能力を有しており、さまざまな面で直接的に日本語の原作から谷崎文学を受容する条件を十分に有していたといえるのである。

郁達夫自身の回顧によると、「高等学校在学の四年間、ロシア、ドイツ、イギリス、日本、フランスの小説を併せて千部ほど読了した」<sup>7</sup>。また、鐘敬文氏の証言により、「仿吾先生（成仿吾、創造社の創始者の一人で、郁達夫と同時代日本に留学した、筆者注）はかつて郁達夫が帝大で三千冊以上の小説を読んだと教えてくれた」<sup>8</sup>。その以外、郭沫若<sup>9</sup>等同時代日本に留学した人の証言からも、一高予科から帝大を卒業するまで郁達夫は四千冊程度の小説を読んだことが推測できる。これらの読書体験を通して、数多くの日本作家の作品に接触したものと考えられる。郁達夫と同時期に日本に留学していた鄭伯奇は、留学時代に郁達夫が谷崎の小説を好んでいたと証言している。

達夫は外国文学の知識も相当に広い。(略)彼の読書範囲は非常に広範で、一人の作家をもっぱら読むのでも、一国の文学を専攻するのでもなく、凡そ名著傑作は、あらかじめ読んだ。頭角を現わし始めた作家、或いはさほど有名ではない作品でも、好みが合えば、興味津々である。彼の好みはロマンの香りの濃厚な、抒情性に富んだ、芸術性の高い作家にあった。

(略)日本現代作家の作品、彼が読んだものも少なくない。その中でも、谷崎潤一郎と佐藤春夫などの作家の小説が、彼が好んだものである<sup>10</sup>。

谷崎は一九二六年一月に二回目の中国旅行をした時、上海にある日本人の経営していた内山書店を訪ねた。書店の主人内山完造は、谷崎を中国の新進気鋭の若手文士に引き合わせるために、「顔つなぎの会」を開いた。この時集まったのは、郭沫若、田漢、歐陽予倩など、いずれも日本留学の経験者であった。谷崎の『上海交遊記』<sup>11</sup>と西原大輔氏の『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』<sup>12</sup>には、当時の状況が詳しく記録されているが、郁達夫に言及していない。だが、内山完造氏の『花甲録』には、その会の案内状を郁達夫に出した記録が残されている<sup>13</sup>。郁達夫がその会に参加し、谷崎と直接的な交流をした可能性もある。谷崎が訪中した後、中国では谷崎ブームが興り、『痴人之愛』(楊騷訳 上海北新書局 一九二八年)、『谷崎潤一郎集』(章克標訳 上海開明書店 一九二九年)など数多くの作品が中国語に訳された。郁達夫がこのブームを経由して、より谷崎文学に惹かれたことは想像に難くない。

帰国後の郁達夫の日記や評論にも谷崎及び彼の作品への言及は頻繁に登場する。『勞生日記』において、郁達夫は『迷羊』を執筆する前日、谷崎の『痴人の愛』を読んだことを記録している<sup>14</sup>し、『在熱波中喘息』では、谷崎の『蓼喰う虫』を「完璧な結晶のような作品」として高く評価している<sup>15</sup>。また一九三五年に太田千鶴夫氏と日本文壇の状況を討論した時、「『春琴抄』を翻訳してみよう」と語ったこともあるし、<sup>16</sup>『日本の侵略戦争と作家』では、谷崎を「いつまでも潮流の中に流されたくない高踏派」とであると論じている<sup>17</sup>。以上の谷崎への直接的な言及以外にも、郁達夫の日記には『改造』、『新潮』等数多くの日本雑誌を読んだことが記録に残されており、これらの雑誌にはしばしば谷崎の作品が掲載された。郁達夫

はそれらの雑誌を通して、谷崎文学に直接接触した可能性が高い。

表1 郁達夫の手にした雑誌に掲載している谷崎作品一覧

雑誌	出版時間	谷崎作品
『改造』	1926年11月号	「青塚氏の話」74-80頁
『改造』	1926年12月号	「青塚氏の話」106-112頁
『改造』	1927新年号	「九月一日」前後のこと」230-251頁
『改造』	1930年4月号	「卍」103-109頁

また、郁達夫は日記に、日本現代長編小説全集の一円本を注文した、と記録した<sup>18</sup> が、資料によると、一九二八年に現代長編小説全集を二冊出版したのは、新潮社である。一九二九年新潮社は『現代長編小説全集』第八巻谷崎潤一郎編を出版した。谷崎の「鬼の面」、「黒白」などの作品が収録されている。郁達夫はこの谷崎編を読んだ可能性も考えられる。

以上、郁達夫と谷崎文学との接触を考察すると、郁達夫における谷崎受容の可能性が高いことは明らかである。この前提に基づいて、以下は『痴人の愛』と『迷羊』二つの作品を取り上げ、谷崎の郁達夫への影響を検討していきたい。

## 2 『痴人の愛』と『迷羊』の構造をめぐって

『痴人の愛』は一九二四年三月から『大阪朝日新聞』に連載、同年六月に検閲当局の警告のため連載中止、同年十一月に続稿が『女性』に掲載、一九二五年七月に改造社より出版された。梗概は以下の通りである。電気会社の技師、河合譲治は、カフェーの女給であったナオミの西洋人じみた美貌に引かれ、自分の理想の女性へ育てようと彼女を自宅に引き取る。譲治は、ナオミの欲しがるありとあらゆるものを買って与え、英語、音楽を習わせ、ハイカラで立派な人間にしようと教育していく。その結果、ナオミは妖艶な女性へと成熟していく。成熟すると共に、ナオミは魔女的に開花し、複数の男性と日々肉体関係を繰り返していた。これを発覚して、一度憤怒した譲治は、ナオミの肉体美から逃れられず、最終的に彼女に服従を誓い、彼女の浮気を甘受した。

『迷羊』は一九二七年十一月から一九二八年一月まで『北新半月刊』に連載、一九二八年北新書局より初出版。梗概は以下の通りである。大学から卒業したばかりで、親戚の関係で省政府の名ばかりの顧問をしている王介成は、劇団の役者であった謝月英に傾倒するようになる。二人は駆け落ちし、南京、上海で放蕩三昧の生活を送り、介成は月英の歓心を買おうと意を尽くし、月英の肉体に一層執着するようになる。経済状況が手詰まりになった後、月英は介成の体を心配するという言い訳で離れ、元の俳優世界に戻った。介成は発狂するまであちこち探したが、二度と会えなかった。絶望した介成は体を病み寝たきりになった。

鈴木正夫氏<sup>19</sup>と劉久明氏<sup>20</sup>は、『痴人の愛』と『迷羊』二つの作品の、構造や人物の設定の類似性について、簡単な感想を述べている。しかし現在のところ、両者の類似点に関して詳細な検討は行なわれていない。

二つの作品は共に悪女のために身を滅ぼす男の物語である。タイトルを詳しく検討してみると、「痴人の」という限定によって譲治の愛が、きわめて一方的なものであることが感じられる。「迷羊」は「スト

レイシープ」とも呼ばれ、その語源は聖書に始まり、神様は群れよりも一匹の迷える羊を気にかけているという神の寵愛の対象を語る喩えとして登場する。日本では夏目漱石の『三四郎』の中で印象的に使われている。荻原桂子氏は、作品末尾の「迷羊」という「三四郎」の眩きは、「美禰子」への「囚われた心」からの解脱を意味すると共に、新しい時代の青年として生きるもう一つの覚醒を促す魂の叫びでもあった、と論じている<sup>21</sup>。郁達夫がこの小説を「迷羊」と名づけたのは、まずは「後叙」に書いているように聖書から引用してきたものだろうが、男主人公がヒロインに溺れることに対しての懺悔と解脱の探求も意味していると思われる。

また、タイトルの字面の意味から見れば、「痴人」はばかな人、愚か者、たわけものという意味だが<sup>22</sup>、「痴」はおろかなこと、おろかものという意味以外、男女間の色情について理性を失ったさまと、一つのことに夢中になるさまという意味もある<sup>23</sup>。中国語の「痴」とほぼ同義である。中国語の「迷」は迷うという意味と同時に、感情的になり理性を失って、或る事にふける、熱中するという意味もある<sup>24</sup>。また中国語では「痴」と「迷」を結びつけていた「痴迷」という言葉もあり、無我夢中になるという意味である<sup>25</sup>。つまり、タイトルから解釈すれば、二つの作品は同じように男性が女に無我夢中になり、自分を見失うことを暗示していると思われる。以上のことから、この二つのタイトルから共通するニュアンスが読み取れる。郁達夫が「痴人の愛」というタイトルと呼応するように意識的に「迷羊」と名づけたのだという可能性もあるのではないだろうか。

また、二つの作品は、共に一人称による告白という形式をとり、『痴人の愛』は書き物、記録、日記、『迷羊』は懺悔録により、主人公の秘密を読者と共用することになる。

『痴人の愛』の冒頭部では、次のように語り手を設定している。

私はこれから、あまり世間に類例がないだろうと思われる私達夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざっくばらんに、ありのままの事実を書いてみようと思います。それは私自身にとって忘れがたない貴い記録であると同時に、恐らくは読者君にとっても、きっと何かの参考資料となるに違いない<sup>26</sup>。

『痴人の愛』において、冒頭部から譲治という語り手を導入し、譲治という「私」に仮託し、過去の行動を一人称で「ありのまま」に告白させるのである。

『迷羊』では、二人の「私」を設定する。一人目は主体として語り手を務める介成という「私」であり、二人目は後叙の中で作者として登場する「私」である。後叙の中で作者の「私」は、「失った女」という留学生の介成の絵がパリの絵画展覧会に入選し、外国の雑誌に高く評価されたという文章を話題にすることを契機にして、友人のアメリカ人宣教師から介成の物語を聞いた、と述べる。彼によると、三、四年前に病院で介成に出会い、キリスト教の教義を教えた後、介成はこの懺悔録を書き出したという。作者の「私」は宣教師からこの懺悔録を見せてもらった後、面白いと感じ、「迷羊」という名をつけて発表したのである。作者のそのような設定は、作者の「私」と懺悔録主体の介成の「私」とをはっきり区別させ、宗教的な「懺悔録」という形で「ありのまま」の叙述であることを強調している。このような二重の入れ子構造は、形式から見ると『痴人の愛』と異なっているが、一人称の「私」を仮託して「ありのまま」に告白させた小説である点は一致していると思われる。

郁達夫の小説のうち、『迷羊』以前に発表した作品の中で、一人称で語っているのは、『友情と胃病』、『血涙』、『蕙蘿行』、『青煙』、『還郷記』等数多くある。一人称で述べるだけでは谷崎からの影響が見られないが、意識的に二重の入れ子構造と宗教的な「懺悔録」という形を採り、「ありのまま」の叙述である

ことを強調しているのは、意識的に『痴人の愛』の冒頭部に接近しようとしたと考えられる。

次に人物の設定について見てみる。讓治と出会った時、ナオミはカフェで給仕女をしていて、家族に言及すると、いつも「不愉快な顔つきをして、言葉を濁してしまう」。当時、料理店や銘酒屋と呼ばれる私娼の売春宿が多かった浅草千束町に住んでいることから、社会的階級の低さを推測できる。讓治からナオミの家が「浅草の銘酒屋」であることを知らされた後に浜田は、「やっぱり育ちというものは争われない」、「生まれつき淫蕩の血が流れていた」という言葉でナオミの性格を表現している。

『迷羊』では、月英は旅行で介成と偶然に出会い、旅館と劇場で知り合いになった。当時は月英は劇団の役者であり、母親も旅芸人で、父親は誰か分からない。小さい時から師匠と共に各地を放浪していて、いじめられることもよくあった。当時、劇団女役者の社会的地位は妓女と同じに見なされ、男と肉体関係を結ぶことはよくあり、「戏子」と見下した呼び方をされ、誰か一人ではなく、社会全体の玩具として存在していた。

女たちの低い社会的、経済的地位に対して、讓治は電気会社の技師で、月給百五十円を貰っていて、親に仕送りする義務もないし、十分豊かな生活を送っていた。介成は名ばかりの政府顧問であったが、月に二百元の給料があり、生活は裕福であった。

このように二つの作品では、女主人公は共に社会的身分を低く設定され、二人とも相手の男達を魅了し、それを存分に利用して彼らを自由に操り、経済的豊かさを手に入れたり、上層社会への道を開いたりしている。ある意味から言うと、男達と関係を取り結ぶことは、彼女達にとって今の境遇から脱却し、上昇する手段なのである。

二つの作品では、男女主人公の出会いは共に現実世界で起こり、男主人公の一方的な熱意により二人しかない「お伽噺の家」といった幻のような世界を作り出し、そこで幸せとも言える生活を送ったのである。しかし、二人の世界に飽きた、或いはお金が手詰まりになった後、現実の世界に戻らざるを得ない。現実世界ではヒロインが様々な人々と交流を持ち続けた結果、讓治や介成に代わる出資者、或いは生きていく糧を手に入れる手段—自分の肉体の魅力を利用すること—を発見し、浮気や家出をしたのである。結末や物語の細部は違っても、そのような構造は相似していると思われる。また、その構造だけではなく、『迷羊』における女性像と女性観にも、谷崎の影響が見られる。

### 3 『痴人の愛』と『迷羊』における女性像

『痴人の愛』では、讓治が初めてナオミと知り合った時、讓治から見ると、十五歳のナオミは「子供」のような存在である。当時ナオミを「まだほんとうの子供」、「極く単純な、無邪気な気持ちで」自分と付き合っていると想像していた。ナオミはこの頃は確かに子供の一面を持っている。「子供らしい」考えで、遊びの気持で「お伽噺の家」を選択した。梯子段の頂辺から転げ落ちて怪我した時、「頑是無い子供のよう」にいっぱい涙をためて、ぽたぽた鼻を垂らしながらしゃくり上げた。最初の四章で、「子供」という表現が繰り返して登場することから、讓治にとって、最初のナオミは単純、無邪気な子供のような存在であることが読み取れる。

『迷羊』では、王介成が初めて出会った時の月英は十七、八歳ぐらいで、劇団の役者をしていても、「可愛い少女」であり、子供のような一面もあった。郊外に遊ぶ時、月英は「まるで子供のように跳び始めた。介成と一緒に駆け落ちした後、月英の駆け落ちに対する考えが大変甘いことに対して、介成は「いつも子供のような話を言うな」と叱った。また、胭脂井を見物した時、介成は「子供に昔話を話すよう」な

気持で月英に胭脂井の伝説を教えたのである。このように、『痴人の愛』におけるナオミにしても、『迷羊』における月英にしても、しばしば「悪女」のような存在と言われるが、最初は子供のような、単純、無邪気の一面もある。また、この最初に子供の一面がある二人のヒロインは共通する肉体的な特徴を持っている。

『痴人の愛』は讓治が魅惑的なナオミの肉体に翻弄され、身を滅ぼしていく物語として有名であることから、ナオミが肉体美をそなえた女であることは言うまでもないが、今までの先行研究では、ナオミの肉体的な特徴はあまり注目されていない。ナオミと由比ヶ浜の海水浴場へ行き、ナオミの海水服姿を見て、讓治が「私のメリー・ピクフォードよ、お前は何と言う釣合の取れた、いい体つきをしている」と賛嘆している。その後、作品では足、尻、肩、手等、ナオミの体の一部をクローズアップする場面がしばしば登場する。

彼女の骨組の著しい特徴として、胴が短く、足の方が長かったので、少し離れて眺めると、実際よりは大変高く思えました。そして、その短い胴体はSの字のように非常に深くくびれていて、くびれた最底部のところに、もう十分に女らしい円みを帯びた尻の隆起がありました<sup>27</sup>。

それからもう一つナオミの体の特徴は、頸から肩へかけての線でした。(中略)で、ナオミのように撫で肩で、頸が長いものは、着物を脱ぐと痩せているのは普通ですけれど、彼女はそれと反対で、思いの外に厚みのあるもの、たっぷりとした立派な肩と、いかにも呼吸の強そうな胸を持っていました。(中略)私は内々そのあたりにいる多くの少女と比較して見ましたが、彼女のように健康な肩と優雅な頸とを兼ね備えているものは外にないような気がしました<sup>28</sup>。

これらの描写から身体の「釣合の取れた」ことや、白さ、豊満さ等ナオミの体の特徴が分かる。谷崎は「恋愛及び色情」という文において、「均整の取れた、健康な肉体を持つ」ことを欧米の婦人の肉体美の特徴として指摘し、そのような特徴を備える肉体を「崇高なる肉体」と見なす<sup>29</sup>。ナオミがその特徴と共通していることは当時の谷崎の西洋崇拜的な表現であると考えられる。

『迷羊』の月英も肉体美を持っている女である。月英の体の特徴、「尻が、高く隆起していて」、「全身の均整が取れている」ことや、白さ、豊満さは、ナオミと共通している。

今日彼女は明るい朱色の外国産ラシャ製の長袍を着ていて、腰がきつく締めつけられ、一層美しくなります。頭には北方の女優たちが一番好きな、黒い綿毛のハンチングをかぶっています。楕円の顔には、人を夢中にさせるほど大きい目をしていて、二重のまぶたの上に掛かっている眉が少し斜めになるのは、よくメーキャップするからでしょう。唇が綺麗な曲線をしていて、口紅を塗っています。首が少し短いようですが、頭がもともと大きくないため、特に彼女の全身の均整が取れていることを損ないません。ああ、彼女の手、柔らかく太く白くて、また小さい手の美しさは言うまでもないのです<sup>30</sup>。

谷崎も郁達夫も、ヒロインの尻、手、目、唇など体の一部の美しさを描くことに紙数を費やしている。そのような肉体美を持っているヒロインは、女性の愛嬌や、自分の肉体の魅力を利用して男を操る女へと変貌していく。

『痴人の愛』では、兵隊将棋やトランプのようなゲームにおいても、ナオミは勝負に勝つために女性の愛嬌や自分の体を武器にして男を操っている。讓治を騙しながら、肉体の魅力を利用して、浜田や熊谷等

多数の男を操っている。浮気を発見された後も、ナオミは意識的に肉体の魅力で讓治に反抗している。家から放逐された後、ナオミは熊谷や西洋人など男達の間を廻り、泊まる所と美しい洋装を求める。讓治も誘惑を仕掛けるナオミの術中に嵌まり、ナオミの肉体の虜となったわけである。

『迷羊』では、月英も男を操る女である。郊外の寺では、介成が階段から落ちそうになった時、月英は介成を抱きかかえた。介成が月英のために病気になって入院した後、月英は見舞いに行き、介成に愛の告白された後、自ら介成に接吻し、抱きしめた。介成が退院してから訪ねてきた時、月英は介成をからかうように、二人きりの機会を作りたがらない様子を見せるが、最後は二人で宿へ行き、関係を結ぶ。その後すぐ介成に、自分の辛い経験や、現在苛められていることを訴え、二人で駆け落ちしようと誘った。駆け落ちした後、月英も肉体の魅力を利用して、あらゆる方法を使い、介成を挑発し、自分の欲求を満足させた。

人の群れで彼女の人の目を引く、満足している様子を見て、私の嫉妬心が湧き出し、まるで人に一目見られると彼女の肉が少なくなるような感じがしてきて、いつも前へ行ったり後ろへ行ったり彼女を覆い隠そうとします。しかも道で会う凶悪なオオカミのような目を持つ男に対して、いつも狂暴に敵対している振りをして反抗します。私のこのような嫉妬、他人のそのような垂涎に、彼女はまるでとても大きい興味があるようで、私が居ても立ってもいられなくて彼女に帰るように催促すると、他人がより厚顔無知に彼女を見てきて、彼女もより艶めかしい笑いで人をそそのかす挙動をして、自分を満足させるのです<sup>31</sup>。

このように、ナオミと月英は物語の後半になると、共に無邪気な子供のような存在から、性に奔放で、肉体の魅力を利用して男を操る女へと変貌していく。そのような変貌が可能であるのは、無論彼女たちの家庭背景、経歴にも関わっているが、当時の西洋化した風俗と接触して、この影響を受けたことも大きな要因だと思われる。讓治がナオミに対して行なった西洋的教育については、数多くの先行研究で指摘されているが<sup>32</sup>、「迷羊」において、介成は月英を当時中国で西洋化の影響を一番受け入れた都市である上海まで連れていき、西洋的な服装と化粧品を買ってやった。月英はそれらの西洋的装飾品を付けた後、女としての自信が一層強くなると同時に、上海で暮らしている女優たちの西洋的な生活ぶりから刺激を受け、介成を捨てることを決心したのだと思われる。この意味から、ナオミにしても月英にしても、男主人公によって作られた妖婦<sup>33</sup>とも言えるだろう。また、この二人の妖婦の行為から時代の先端に立つモダンガールの影が見られる。

千葉俊二氏は、『痴人の愛』が「みごとな風俗小説」であり、「大きな時代変革の波を受け、生活感覚や道徳意識などあらゆる価値観が大きく揺らいだこの時代に、『痴人の愛』が時代的先端をゆく流行現象を捉え、当時の若者やサラリーマンが潜在的に領していたモダンな生活への夢をみごとに描きえた」、この作品は「大正年代の西洋化した風俗と正面から取り組み、その風俗描写の中に自己の文学的テーマをみごとに定着せしめ得た作品と言える」と述べている。<sup>34</sup>

鈴木貞美氏は、「奔放な振る舞いで中年男を迷わし、外国人とダンスをして見劣りしない」ナオミが、「明らかにモダンなのだが」<sup>35</sup>、「モダン」という言葉が出てこない、「ハイカラ」ということばを使っていると分析している。

千葉氏と鈴木氏はそれぞれに『痴人の愛』という作品とナオミというヒロインのモダン性を指摘しているが、ナオミその人のモダン性の様相についてあまり触れていない。

ナオミは元々モダン的な興味を持っており、活動写真や西洋花を好み、英語と音楽を習いたいと思って



いる。譲治と結婚した後、経済的には譲治を頼りにしているが、自分の権利を主張したり、譲治に反抗したりしている。関東大震災前後の銀座では最もモダンな文化的象徴であったカフェの舞踏会やダンスクラブなどに通いはじめてから、ナオミは次第により性的に自由奔放な女へと変貌していく。ダンスクラブで知り合った複数の男性を頻繁に大森の家へ引き入れたり、四人の男と一緒に一つの部屋に雑魚寝したりしている。最後は「子供を生んでくれ」と要求されても、きっぱりと断るし、多くの男を相手に奔放な生活を送っている。

このように、結婚しても、音楽と英語に興味を持ち、自由と権利を主張し、結婚による束縛を嫌い、家事や子供を生むことを断り、性的に奔放であることから見ると、ナオミは明らかにモダンガールの一面がある。

『迷羊』の月英にも、モダンガールの一面があると思われる。無論職業や家庭背景とも関わるが、月英は他の同年代の女と違い、「闊達な性格を持っていて」、自然に男と付き合っている。元の恋人である陳君に裏切られた後、同僚に苛められることに不満で、現在の暮らしを捨て、介成と一緒に駆け落ちをした。

介成と一緒に暮らしている時、月英が興味を持つのは洋装、外国の髪型、化粧品や大都市のモダン的な生活様式である。介成が自分をどれほどかわいがっているにもかかわらず、介成との生活に飽きた後、ためらうことなく介成を捨てて、自分好きな道を選んで、元の女優の世界に戻った。月英は男の意志に従わず、一人の男と結婚して、その束縛を受けることより、自分で好きな道を選んだことには、当時のモダンガールの影が見られる。

以上の分析から、『痴人の愛』と『迷羊』における女性像に多くの共通点のあることがあきらかである。ナオミにしても、月英にしても、共に子供のような無邪気な一面もあり、共通した肉体的特徴をそなえ、共に西洋的なモダン文化と接触した後、肉体の魅力を利用して男を操る女に変貌していく。二人の行為には時代の先端に立つモダンガールの影が見られる。

#### 4 『痴人の愛』と『迷羊』における女性観

『痴人の愛』と『迷羊』二つの作品では、女性像以外、男主人公は一体どのようにヒロインを見ているのか、その女性観には谷崎の影響があるかどうか興味深いと思われる。ここでは男主人公の女性観について検討していきたい。

『痴人の愛』では、譲治が初めてナオミへの崇拝を告白したのは、二人が関係を結んだ後である。

僕の可愛いナオミちゃん、僕はお前を愛しているばかりじゃない、本当を言えばお前を崇拝しているのだよ。お前は僕の宝物だ、僕が自分で見つけ出して研ぎをかけたダイヤモンドだ。だからお前を美しい女にするためなら、どんなものでも買ってやるよ。僕の月給をみんなお前に上げてもいいが<sup>36</sup>。

その後、譲治がナオミへの崇拝は、ナオミの英語の理解力のなさに不満すること等で、ナオミの精神的方面の教育を諦め、肉体にこだわるようになる。ナオミが娼婦的性格であることが分かった後、「まったく彼女の肉体の魅力、ただそれだけに引き摺られつつあった」ため、ナオミに未練を残し、「時としてはその卑しむべき娼婦の姿を、さながら女神を打ち仰ぐように崇拝さえもした」。さらに、ナオミの体が譲治にとって「全く芸術品」であり、「奈良の仏像以上に完璧なもの」である。譲治はナオミの体を「しみじみ眺めている」と、「宗教的な感激さえが湧いて来るようになる」。

また、讓治はナオミの肉体を崇拝することで、肉体への無限の欲求に陥ったあげく、「胃が悪く、記憶力が衰え」、「元気がない」、「頭の中には奇妙なナオミの匂ばかり浮かんでき」たように、精神的にも肉体的にも病を患う。

『迷羊』に登場した王介成も同じように女の肉体に執着している。初対面の時、介成は月英の肉体に惹かれ、月英に溺れたのである。月英と接吻した後、「彼女を待つ気持ちは、多分熱心な宗教狂者が基督再臨を待ち望むような熱望しか比べることはできない」。肉体関係を結んだ後、介成の月英に対する敬慕や崇拝の観念がより強くなる。二人で一緒に駆け落ちした後、介成は心中で次のように月英の肉体に感溺していることを告白した。

私達の興味は言えば言うほど強まり、船の窓の外の冷たい雨はまったく私たちの気持に影響せず、雨だけではなく、明日夜が明けなくても、地球が沈んでも、私達とは少しも関係ありません。私はこの時これしか考えられないで、手に抱えているのは謝月英が18年半かけて育てきた豊満な肉体で、口に啜っているのは愛情を持つ動物なら誰でも感溺させる赤くて甘い唇で、また下、下の……。ああ、このまま死んでも、私の26年が無駄に生きたとは言えません<sup>37</sup>。

上海から戻った後、月英の様々な新しい装飾を見て、彼女の肉体に対する要求はますます高くなる。月英の肉体に執着しすぎたため、介成の精神は異常をきたし始めた。毎晩彼女を抱かないと眠れない、眠ると彼女に捨てられる夢を見た。また、讓治と同じように、精神だけではなく、あまりに性欲が亢進したため、肉体的にも病気になる、日増しに痩せてしまうようになる。

以上の分析から、二つの作品では、肉体美を持っているヒロインに対して、男主人公たちは同じように神のように崇拝している。『痴人の愛』ではナオミに「宗教的な感激」を持って、「女神を打ち仰ぐように崇拝」しているに対して、『迷羊』でも「死んでもいい」ほどや、「宗教狂者が基督再臨を待ち望む」ように月英を崇拝しているのである。

一方、男の主人公は女を神のように崇拝していると同時に、女を玩具として弄んでいる。讓治が最初ナオミを引き取ったのは、ナオミの西洋人くさいところに引かれ、彼女に同情した一面があるが、「自身のあまりに平凡な、あまりに単調なその日暮しに、多少の変化を与えて見たかった」という一面もある。ナオミを引き取った後、「小鳥を飼うような気持」で、彼の好む「ハイカラ」趣味の一環として、ナオミを「ハイカラ婦人」として教育しようとした。讓治にとって、ナオミが自分の遊び心を満足させる人形や装飾品のような玩具である。

それらは実際ただ部屋の中で、彼女をいろいろな器に入れて眺めるための、容れ物だったに過ぎないのです。例えば一輪の美しい花を、さまざまな花瓶へ差し換えて見るのと同じ気持だったでしょう。私にとってナオミは妻であると同時に、世にも珍しき人形であり、装飾品でもあったのですから、敢えて驚くには足りないのです<sup>38</sup>。

また、讓治にとって、ナオミは自分の虚栄心を満足させる一つの道具でもある。「もともとナオミを妻にしたのも、彼女をうんと美しい夫人にして、毎日方々へ連れ歩いて、世間の奴等に何と彼とか言われてみたい。」どんなにナオミの肉体に感溺していても、本物の西洋人のシュレムスカヤ夫人の前に出ると、夫人の胸に抱かれて踊ることは讓治にとって「何よりの楽しみ」になって、「まったくナオミの存在を忘れた」ようになる。谷崎は『蓼喰う虫』で「女というものは神であるか玩具であるかのいずれかであって」

と述べているが、ナオミは讓治にとって神であり、かつ玩具でもあると思われる。

『迷羊』では、介成は月英が「玩具にされることを職業にする」女であることがわかって、初め月英に幻想を抱いた。二人が一緒に胭脂井へ行った時、介成は月英の貞節観が分かった後、讓治と同じように女の精神や道徳に対する追求を諦め、ただ肉体の魅力に耽溺するようになる。この時から月英が介成にとって性の相手にすぎない存在へ変貌していく。他の男が月英を見ると、介成は嫉妬して、彼女への「所有欲」もより強くなり、ある「激情の爆発と筋肉の虐待」のように、飽きなく彼女に肉体関係を要求した。

月英に捨てられた後、介成はしばしば月英が元の世界に戻り、多くの男に弄ばれる場面を想像して、潜在意識ではやはり月英を玩具にされる女として見なす。ほかの男とも肉体関係を持つ可能性があるとは分かったのに、狂人のようにあちこち月英を探した。その理由は、愛より、性欲の相手である月英の肉体の魅力に耽溺したためと思われる。その意味から介成は、月英を玩具として弄ぶ数多くの男の一人に過ぎない。

以上の分析から、二つの作品で男にとって女は同じように「神」であり、かつ「玩具」でもあるように存在していると考えられる。郁達夫の『迷羊』以前の作品では、性欲の相手としての女の肉体に惹かれる男主人公はよく登場しているが、肉体に執着していることで、ヒロインを神のように崇拝している、かつ女を玩具として遊んでいる主人公は見られない。ここから『痴人の愛』からの影響が見られると思われる。

## おわりに

本論では、まず郁達夫本人や友人による留学時代の郁達夫の読書状況の証言や回顧、また、郁達夫の日記や評論に見られる谷崎や彼の作品への言及等を考察することを通じて、郁達夫における谷崎受容の可能性が高いことを確認した。そして、この前提に基づき、『痴人の愛』と『迷羊』二つのテキストを詳細に比較した結果、両作品の構造や女性像、女性観には数多くの類似点があることが判明した。これにより、郁達夫が『痴人の愛』から多くの点を受容し、自身の作品に活かしていったことは明らかだと思われる。

だが、作家の経歴や芸術主張等より、二つの作品が完全に一致するわけではない。二作品では、谷崎の受容において、郁達夫の特性は女性観にあると思われる。ナオミは、谷崎の同時代の作品『肉塊』における妻民子、『神と人の間』における妻朝子と違い、完全に伝統的良妻賢母の貞淑なイメージを捨て、純粋な娼婦型の妻である。それに対して、月英の場合は、恋人という位置に止まり、元々役者だったので、より多く娼婦的な面を持っていてもおかしくないが、意外に温順、善良の一面も表れている。月英は男を操る女として存在しているが、介成と離れる前に、介成の好きな蓮子粥を煮たり、介成に体を大事にするようにとの手紙を送ったりしているのがそれである。月英は伝統的な中国女性とは異なり、大胆に自分の生活を追求する一面があるにもかかわらず、伝統的な女性と完全に切り離せない側面も持っているのである。このように、郁達夫は、谷崎の女性の道徳を諦め、肉体だけを崇拝しているというモチーフを吸収しながら、そのような女性観を懺悔録という形で反省し、女性の精神面にも希求していると考えられる。

「付記」

本稿の内容は、口頭発表「郁達夫文学における谷崎潤一郎受容—『痴人の愛』と『迷羊』を中心として—」（日本比較文学会第七十一回全国大会、大阪大学、二〇〇九年六月二十一日）の内容に加筆修正したものである。『迷羊』からの引用は全て拙訳。

**Keyword:** Junichiro Tanizaki, Dafu Yu, Naomi, Stray Sheep

- 1 伊藤虎丸『近代の精神と中国現代文学』汲古書院、二〇〇七年十月、二八〇頁
- 2 張能泉「中国現代文壇対谷崎潤一郎の翻訳と接受」『日本文学論壇』、二〇〇七年四月
- 3 李麗君「郁達夫と近代日本について」『比較社会文化研究』第十号、二〇〇一年。当論文も、富長蝶如、石田幹之助、佐藤智恵子、増井経夫、増田渉五人の郁達夫を知った日本人の回想や証言を挙げ、郁達夫の日本語の上達振りを述べている。
- 4 「井伏鱒二氏」伊藤虎丸等編『郁達夫資料補篇』（下）東京東洋文学研究所附属東洋学文献センター、一九七四年七月、二一二頁
- 5 李麗君氏が挙げる、日本語で書かれた郁達夫の作品や書簡は、以下の通りである。
  - 1、日記「塩原十日記」 日本『雅声』第三、四、五集、一九二一年
  - 2、声明文「日本の同志に訴う」 日本『文芸戦線』第四卷第六期、一九二七年
  - 3、佐藤智恵子宛 一九二八年一月十三日 『郁達夫資料補篇』（下）、一九七四年
  - 4、佐藤春夫宛 一九二八年三月九日 同上
  - 5、井伏鱒二宛 一九三六年九月二十八日 同上
  - 6、「今日の中華文化」（上、下）『読売新聞』、一九三六年十一月二十九日、十二月一日
  - 7、講演録「支那の現状に就て」『霞山会講演』第三十九輯、一九三六年十二月
  - 8、講演録「支那文学の変遷」『台湾日日新報』、一九三七年一月
  - 9、評論「日本の朝野よ支那を見直せ」『大阪毎日新聞』、一九三七年一月
  - 10、雑文「魯迅の偉大」『改造』、一九三七年三月中国語に翻訳した日本の作品
  - 1、「出家と自殺」（細田源吉）一九三〇年十二月訳 『新学生』創刊号、一九三一年一月
  - 2、「自己短評」（葉山嘉樹）一九三〇年十二月訳 『新学生』創刊号、一九三一年一月
  - 3、『徒然草』選訳（兼好法師）『宇宙風』第十期、一九三六年二月
- 6 郁達夫「円明園の一夜」『郁達夫全集』第1巻 浙江大学出版社、二〇〇七年を参照。
- 7 郁達夫「五六年来創作生活的回顧」『文学週報』第五卷第十号、一九二七年。引用は『郁達夫全集』第五巻 浙江文芸出版社、一九九二年、三三八頁。原文「在高等学校里住了四年，共计所读的俄、德、英、日、法」的小说，总有一千部内外，后来进了东京的帝大，这读小说之癖，也终于改不过来，就是现在，于吃饭做事之外，坐下来读的，也以小说为最多。」
- 8 鐘敬文「憶達夫先生」『文芸生活』第十七期、一九四七年十月。引用は陳子善等編『郁達夫研究資料』（上）一六八頁。原文「他的阅读兴味主要是在小说上。仿吾先生曾经告诉过我，他在帝大读过三千本以上的小说。」
- 9 郭沫若「論郁達夫」『人物雜誌』、一九四六年。引用は陳子善等編『郁達夫研究資料』（上）花城出版社、一九八五年、九二頁。原文「他也喜欢欧美的文学书，特别是小说，在我们的朋友中没有谁比他更读得丰富的。」
- 10 鄭伯奇「憶創造社」『文藝月報』一九五九年第五、六、八、九号。引用は王延晞・王利編『中国現代文学史資料彙編（乙編）鄭伯奇研究資料』山東大学出版社、一九九六年、一一〇、一一一頁。原文「达夫的外国文学知识也是相当渊博的。（略）他读书的范围非常广泛，不专读一个作家，也不专攻一国文学，凡是名著杰作，他大都阅读。甚至初露头脚的作家，或者不大出名的作品，只要兴趣投合，他也津津乐道。他的兴趣所在似乎是浪漫气息浓厚的、富有抒情味的、艺术性较高的作家。（略）日本现代作家的作品，他阅读的也不少；其中，谷崎润一郎和佐藤春夫等人的小说是她比较喜爱的。」
- 11 谷崎潤一郎「上海交遊記」初出『女性』大正十五年 五、六、八月。『谷崎潤一郎全集』第十巻 中央公論社、一九八二年を参照。
- 12 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』中央公論新社、二〇〇三年
- 13 内山完造『花甲録』岩波書店、一九八一年版、一二二頁
- 14 郁達夫「勞生日記」一九二六年十一月三日、初出『日記九種』上海北新書局、1927年。引用は『郁達夫全集』第十二巻を参照。

- 15 郁達夫「在熱波中喘息」初出『現代』第一卷第五期、一九三二年九月一日。引用は『郁達夫全集』第六卷、三一頁。原文「文笔の浑圆纯熟,本就是这一位作家的特技,而心理的刻划、周围环境的描摹、老人趣味和江戸末期文化心理的分析,则自我认识谷崎,读他的作品以来,从没有见过比这一部《食蓼之虫》更完美的结晶品过。这一部书,以我看来,非但是谷崎一生的杰作,大约在日本的全部文学作品里,总也可以列入到十名以内的地位中去的。」
- 16 大田千鶴夫「中華民國文壇の雄郁達夫と語る」『読売新聞』、一九三五年十二月十五日朝刊九面
- 17 郁達夫「日本の侵略戦争と作家」初出『星州日報・晨星』、一九三九年二月二十日。引用は『郁達夫全集』第六卷、三六五頁。原文「原来日本の文人,一面也还有一种中国的传统风习,遗留在他们的身上的。这一派人,就是无论在什么时候,都不愿意混入潮流中去的高踏派。(略)像白桦派的志贺直哉,浪漫派的谷崎潤一郎等,就是这些少数人的代表。」
- 18 郁達夫日記 一九二八年四月三十日。『郁達夫全集』第十二卷、二七一頁を参照。
- 19 鈴木正夫「郁達夫と日本文学」『復旦学报(社会科学版)』一九八四年六月、一一三頁
- 20 劉久明「郁達夫与谷崎潤一郎」『東洋大学中国哲学文学科紀要』二〇〇二年十月、一五三頁
- 21 荻原桂子「『三四郎』論—「迷羊」について」『九州女子大学紀要』二〇〇二年二月の参照
- 22 新村出編『広辞苑』第五版、岩波書店、一九九八年
- 23 同上。「痴」の一、二、三番目項目の参照。
- 24 依藤醇等編『中日辞典』第二版 小学館/北京商務印書館、二〇〇三年。「迷」の一、二番目項目の参照。
- 25 同上。
- 26 谷崎潤一郎「痴人の愛」『谷崎潤一郎全集』第十卷、一頁。以下の引用は同じ。引用の際、旧字体は新字体に改め、ルビは省略。
- 27 谷崎潤一郎「痴人の愛」『谷崎潤一郎全集』第十卷、三五頁
- 28 同上、三六頁。
- 29 谷崎潤一郎「恋愛及び色情」『谷崎潤一郎全集』第二十卷
- 30 「迷羊」『郁達夫全集』第二卷、六二頁。原文「她今天穿的是一悠扬银红的外国呢的长袍,腰部做得很紧,所以样子格外的好看。头上戴着一顶黑绒的鸭舌女帽,是北方的女伶最喜欢戴的那一种帽子。长圆的脸上,光着一双迷人的大眼。双重眼脸上挂着的有点斜吊起的眉毛,大约是因为常扮戏的原因吧?嘴唇很弯很曲,颜色也很红。脖子似乎太短一点,可是不碍,因为她的头本来就不大,所以并没有破坏她全身的均称的地方。啊啊,她那一双手,那一双轻轻肥白,而又是很小的手!手背上的五个指脊骨上的小孔。」
- 31 同上、一二七頁。原文「在人丛中看了她那种满足高扬,处处撩人的样子,我的嫉妒心又自然而然的会从肚皮里直沸起来,仿佛是被人家看一眼她身上的肉就要少一块似的。我老是上前落后的去打算遮掩她,并且对那些饿狼似的道旁男子的眼光,也总装出很凶猛的敌对样子来反抗。而我的这一种嫉妒,旁人的那一种贪视,对她又仿佛是有很大的趣味似的,我愈是坐立不安的要催她回去,旁人愈是厚颜无耻的对她注视,她愈要装出那一种媚笑斜视和挑拨的举动来,增进她的得意。」
- 32 齋藤 有子「ナオミという鏡」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊七』、一九九九年)、猪又菜美子「谷崎潤一郎『痴人の愛』—西洋と日本の関係について」(『筑紫国文』(二五)、二〇〇二年)等を参照。
- 33 谷藤葉月「作られた妖婦—『痴人の愛』にみる谷崎潤一郎の女性観」『日本文学誌要』第七二号、二〇〇五年七月を参照。
- 34 千葉俊二『谷崎潤一郎—鑑賞日本現代文学八』角川書店、一九八二年、九十八、九十九頁
- 35 鈴木貞美『モダン都市の表現—自己・幻想・女性』白地社、一九九二年、十四頁
- 36 「痴人の愛」『谷崎潤一郎全集』第十卷、四十三頁
- 37 「迷羊」『郁達夫全集』第二卷、一〇二頁
- 38 「痴人の愛」『谷崎潤一郎全集』第十卷、四十七頁